嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第45号／2001年（平成13年）2月発行（年3回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋1－30－9（〒156-0055）　TEL 03-3426-2323
ホームページアドレス　http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/
メールアドレス　kisen@mxg.mesh.ne.jp
・発行人＝石井哲夫　・編集人＝小山裕子

クリニックの新世紀

クリニック川畑　児童精神科医　川　畑　友　二

クリニックを開院してから一年半が過ぎた。今、当院を訪れる患者の多くは二十歳以下の子どもたちで、幼稚園児や小学生の子どもたち、そして親たちも数多くやってくる。大きな病院にいるときにはあまり診ることがなかった子どもたちである。

色々な事件や青少年の問題が新聞やテレビをにぎわす昨今ではあるが、確かに子育ての難しい時代なのかもしれない。色々な情報が飛び交い、価値基準も一定せず、何が良くて何が悪いことなのか迷う時代である。つまりは子どもに伝えるべきものを親たちが見失っている時代とも言えるだろう。世の中全体の問題であるのは間違いないのであろうが、ただ時代を愁いてばかりいても始まらない。子どもたちの精神疾患の若年化と重症化は様々なところで言われているが、私がクリニックを始めようと思ったのもそのことにある。少子化や核家族化、地域の崩壊がもたらしている現実はすぐそこにある。もっともっと身近に相談する相手が必要なのだろう。もちろん子育てする親も人の子、不完全な存在である。少しでも、と思った。

混沌とした現代の先にあるのは、「自分は何を大切に思うか」が問われる時代になるのだろう。調和を持った個人の時代になっていければと願うが、その前に必要なのは、やはり我々大人ひとりひとりが余裕を持って生きることだと思う。

（おおらか学園嘱託医）

社会福祉援助論（その八）

石井哲夫

社会福祉援助という言葉の響きは美しい。なるが故に熱意さえあれば全ての不幸な人への関わりを由とする。熱意があるが故に社会福祉施設での暴力行為が生じてきた。他人を援助する熱意と、よいことをしているという自己満足が交錯して、多少のミスが許されると錯覚した愚かな援助者の問題であり、このことは誰でもが犯しやすいことであった。度重なって施設から犯罪者が摘発されてきて、社会福祉施設否定が定着しようとしてきている。これは重大なことである。社会福祉施設を一度は否定して、新たな福祉システムを構築することは、今の時代に必要なことであって、基本的には、今回の社会福祉基礎構造改革を支持する者であるが、さりとて、ピーターパン症候群のように、運を天に任せて明日の希望を夢見ているほど若くはない。具体的に芽生えてきている周囲の動向を注視しながら弾力的な構想の実現を考えなければならない。我ら臨床家は、政策学者のような大所での議論だけで終わらせられない悩みを抱えていて、きわめて現実的な根拠を求めていかなければならないのである。

そこで周囲の社会福祉法人や社会福祉施設の動向に注視すると、驚くべきほどの思想の変身が随所に見られてくるのである。

地域の人たちが利用しやすい憩いのデイケアとか、自由にお年寄りやお子さまをお預かりする地域交流の部屋とか、あらゆる障害に関しての相談に応ずる臨床心理士が配属されているとか、コミュニティセンター等という文字が目に付くようになってきている。実態を調べてみたわけではないが、社会福祉法人が、高々一人二人の人手で、広告のようなことが出来るはずがない。かく言う我が法人嬉泉でも、何年もかかって、板橋区の委託を受けて、地元板橋区民のために緊急一時保護という困難な仕事を行ってきている。この事業は公設民営の事業として他に類を見ないほど処遇困難な身体障害や自閉症への対処を行って行政から喜ばれている。また、千葉県袖ヶ浦市においては、二つの施設、袖ヶ浦のびろ学園、袖ヶ浦ひかりの学園を拠点にして、地域療育事業を展開しているが、これこそ無い袖を振ると言うことで、地元の障害児者を抱えている親たちと接触して、その施設を用いての一時預かりや、通所の相談援助を細々続けているが、これとても二人の園長経験者（うち一名は非常勤）が関わって、その上施設職員の応援を得て何とか行っている事業である。そして今度は、昨年から始めた東京世田谷区の子どもの生活研究所を拠点としてのよろこびセンターの発足である。これはこぐま学園という広地域がら、就学時も含めた広い年齢層の自閉症児者に関わる支援事業を母胎としているが、新たに、ボランティアの育成や、地域に向けての障害児者援助のための教養、専門講座とか、また、法外支援事業として、ベビーシッターに対して自閉症児援助を研修する事業等を開発的に始めてきている。

これらは、その他に六つの法内事業を行う社会福祉施設を抱えての話であるから、その内外に対しての気配りはなかなか大変なものである。特に経営的には、いつも出たとこ勝負という具合にならざるを得ない。それでもやらなかった時から見て、よい方向に誘導されてきているという感じはすることはする。これが一法人のみでなく全国的にどのように展開されていくのか、想像がつかない。恐らくこのような競争関係によって、施設の実質的な淘汰が徐々に進んでいくことになるであろう。これからの行政はよい民間の社会福祉事業をだめにしないような第三者評価をキチンと行い、よいものを奨励していくような支援策を迅速にとっていく必要があると思っているのである。我が方としては、出来るだけ従来から大事にしてきた利用者との「受容的交流理論」の実現を図っていくのみである。

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

「ART合宿」

めばえ学園　大岩　香代子

『ART』とは受容的交流理論（Acceptable Relationships Theory）の略であり、「アート」と読ませる。そこに発題者である石井所長の思いも込められているように思う。それは受容的交流理論が、いわゆる障害特性にのみ焦点を当てた型通りの技法とは異なり、豊かな内面世界への深いまなざしによって人間としての自己実現を可能にしようとしているものであること、そういう点において芸術と源流を同じくするもの、といったことなのではないかと思う。

『ART合宿』とは、そのような「受容的交流理論に基づいた体験合宿」として、外部の療育や教育現場へと発信し、研修参加者を募って行った合宿のことである。

そもそも『合宿』は、私たちの仕事の原点であり、長年に渡って職員の内部研修として継続してきたものであるが、昨年度12月、『第1回ART合宿』として初の試みを行った。形態としては、「日常的な体制を離れ、自閉症児者と生活をともにしながら原点に立ち返って学ぶ」ことをねらいとした従来の職員研修合宿に参加していただき、一部研修生用のプログラムを加える、という形を取った。そして「2泊3日、定員6名」として、主に夏の『自閉症実践療育セミナー』の受講者を対象に参加者を募ることにした。始めのうちは、企画したものの〝果たして参加者が集まるのかどうか〟〝集まったところで、御期待にかなう様な体験を提供することができるのかどうか〟〝短期間の中でどれ程受容的交流理論の真髄をお伝えすることが出来るのか〟等、不安な思いは尽きなかった。しかし幸いにして、7名の方々にお申し込みいただき、石井所長を始めとして、嬉泉各事業所の園長や現場責任者を配した運営とスーパービジョン体制のもと、内容の濃い合宿となった。参加者の反響も大きく、ホームページに報告として掲載したところ、何件か「今年もやるのか」といったお問い合わせをいただいた。

そうした経過の中で、今年度も『第2回ART合宿』を実施するに至った。当初、昨年度の2倍を超える申し込みをいただき、それぞれの方の切実な問題意識と熱心な志望動機の前に、大変心苦しくはあったが、運営上、受け入れ可能なところで、先着8名の方に限らせていただいた。プログラムは『石井所長の事前講義』を皮切りに、『石井所長の指導及び職員へのスーパービジョン場面の見学』『各スーパーバイザーによる、具体的体験を通してのスーパービジョン』等、初回とほぼ同じであるが、内容的にはより凝縮されたものとなったように思う。また事後のアンケートでも、それぞれの方々より、〝期待以上のものを得ることが出来た〟〝貴重な体験ができた〟等の声をお寄せいただいている。

以上のように、試みに始めた『ART合宿』ではあったが、その中で確実に外部との接点が広がりつつあることが感じられる。同時に様々な困難や問題を抱えている自閉症児者の療育現場において、嬉泉の実践に向けられる要請も増してきているように思う。そのような要請に応じ、他の療育現場の人達と関わっていくことは、私たちにとっても日頃の実践を見直し明確にしていく、大事な自己研鑽の機会でもあるのだ、と思う。

一方で現実的には、限られた人的物的条件のもと、どこにポイントを定めていくのか、内部的な職員研修とのかねあいはどうしていくか等、今後の検討課題もまた明らかになってきている。

特別寄稿

高機能広汎性発達障害の重大な問題行動について
――「豊川主婦殺害事件」をめぐって――

中京大学社会学部
辻井　正次

(1) はじめに

昨年末の「豊川主婦殺害事件」で、加害者がアスペルガー症候群という精神鑑定が出て、そのことがマスコミによって大々的に報道されたことは、私たち専門家のみならず、アスペルガー症候群や高機能（知的障害のない）自閉症など関連する自閉症スペクトラム障害（広汎性発達障害）のご本人や親御さんたちに衝撃を与えました。この小論では、アスペ・エルデの会という東海地区の高機能広汎性発達障害の発達支援システムの統括ディレクターをしている立場から、こうした重大な問題行動について若干の見解をお伝えしたいと思います。

(2) 自閉症と高機能広汎性発達障害

広汎性発達障害とは自閉症と類縁の、社会性の先天性障害を中心症状とする発達障害です。今まで、自閉症は知的障害を伴う者が大多数と思われてきましたが、最近の調査・研究のなかで、半数程度はそうではなく、全人口の中で少なくとも0.4％程度（250人に1人）もいることがわかってきました。ところが、このグループは最近まで余り存在を知られておらず、専門家によってさえ誤った診断を下されていたり、また青年期以後まで診断も治療も受けていない例も非常に多いです。高機能自閉症とアスペルガー症候群は、自閉症と共通の社会性の障害・コミュニケーションの障害・想像力の障害をもつことでは同じですが、幼児期の言語の発達の遅れがない場合にアスペルガー症候群と呼びます。乳幼児健診での精神発達のチェックは言葉の発達を中心に行う場合が多いので、言葉の発達の遅れがない場合に、早期発見されない場合も多いのです。その後も、彼らのトラブルは理解されにくいです。発達障害として、もって生まれた要因によって他者の意図や感情の読み取れなさがあるのでトラブルを引き起こしてしまう、とはなかなかわかってもらえません。親たちはいまだに躾が悪いと責められることもあります。教師の理解も徐々に改善はしているものの知識不足から理解が足りずに、子どもたちは学校生活でいろいろな苦労を体験します。就労に関しても大きな苦労があることが少なくありません。

「高機能」というと、ひょっとして字面だけから機能が高いのだからと無条件によいもののように感じる方もいるかもしれませんが、抱える社会性の障害は軽いわけではなく、何より現状の障害者福祉制度の恩恵が受けにくいのが実情です。

知的能力が正常であると、「普通」を振舞うことを要求されることも少なくなく、その分、本人が意識化する困難さは大きいです。知的障害のある場合とそのあり様は違いますが、どちらも困難さを生涯もちつづけていくことは変わりません。昨春のTVドラマ「君が教えてくれたこと」の主人公の繭子は、そうした高機能広汎性発達障害の女性でした。

(3) 高機能広汎性発達障害と犯罪

高機能広汎性発達障害、特にアスペルガー症候群が犯罪を犯したという報告はごく少数ながらなされています。しかし、殺人に至るような凶悪犯罪を犯すことは非常に稀なことです。ガジュディンなどが1991年に出した論文では、報告されたアスペルガー症候群132例中、攻撃的累犯行動は3例のみであり、一般の若者たちの重大な犯罪を犯す率と比較すると非常に少ないことは疑いなく、高機能広汎性発達障害と犯罪との間に因果関係を見いだすことは出来ないと結論づけています。体験的にも、彼らは悪意を持つことは困難です。むしろ言葉どおりにとってしまって、からかわれたり、騙されたり、被害者として犯罪に合うことや、交通規則を完全に守りすぎることから生じるトラブルなどの方が多く経

験します。さらに、重大な犯罪行為を犯した症例の場合、その全てが事件まで診断を受けることもなく、適切な治療教育も受けずに成長しています。そうした治療教育があれば、犯罪へのリスクを大きく軽減させることができただろうと思われます。

一方、彼らのこだわりやパニックなどに関連しての軽犯罪行為についての報告もあります。彼らの心の中でどうしても止め得ない衝動が制御できず、あるいは、パニックのなかで物を壊してしまったりといったことはしばしばあります。ただ、その場合にも引き金となるものがあったり、理由があったりすることが多く、治療的介入や、場合によっては児童精神科医による薬物療法の併用で改善が期待できます。

(4) 残されてきた問題に目を向けること――悲劇を再び起こすことのないように

高機能広汎性発達障害の存在自体、今まで目を向けられることがあまりなかった問題です。そして、こうした犯罪などの重大な問題行動のリスクについて、十分に検討してこられなかったことも事実です。今回の悲劇を決して繰り返すことのないように、高機能広汎性発達障害を始めとした軽度の発達障害についても、しっかりとした取り組みをしていくことが必要です。

最後に、「豊川主婦殺害事件」の被害者やそのご家族の皆さんに心よりのお悔やみを申しあげます。

（この小論は、杉山登志郎氏（静岡大学教育学部）との共同研究の成果をもとにしています）。

辻井氏の原稿に寄せて

石井　哲夫

最近、高機能自閉症や、アスペルガー症候群のことが興味を持たれている。豊川事件における犯人の鑑定書にアスペルガー症候群という症状名が発表されてから、それが発達障害の中での広汎性発達障害の中で自閉症の分類と関係が深いことから、自閉症の親から、世の中での誤解をさけるための運動的な動きが始まってきた。困ったことにマスコミでは、独自にその専門家とおぼしい人にこの問題を尋ね始め、かなりピントのはずれた解説もでたようであり、これは困ったことになると密かに心配していた。私は日本自閉症協会の副会長であったこともあり、協会の対応を求める動きにも応じなければならなかったが、もし学問的な見解を求められれば、協会の研究部会長の山崎晃資氏の所にそれを集中すべきことと考え、人にも告げていた。後日山崎さんに見解を尋ねたところ、彼も見解は同じで、「求められれば、いつでも鑑定医の鑑定書や新聞報道についての考えを述べるが、現状では、別に取り立てて騒ぐような事態ではない。」ということであった。私はその上でなお、他の専門家としてアスペの会として辻井正次氏や、杉山登志郎氏の活動を日頃から注目もし、有り難く思ってもいたので、本法人嬉泉にも出来ているアスペの会東京支部の柏木さんを通して、本部の見解を受けていくように親たちにも伝えたのであった。かくして、関係者からの心配の声も聞こえなくなってきたが、インターネット上でいろいろな意見のやりとりがあったと聞いている。今回ここに辻井先生にかなり無理を押して書いていただいた理由は、我が嬉泉が、社会的な先駆的な活動を行っているとしてのアスペの会のような活動から学ぶ機会を持ちたいからである。

高機能自閉症といい、アスペルガー症候群といい、なまじ持てる才能のために、この世の苦労が絶えない人たちは、誤解の積み重ねにあえいで暮らしているし、親たちも見るに見かねても、どうしようもないという辛い暮らしとなっていることを聞くにつれ、我々の仕事の合間にも、このような運動に何らかのお手伝いをしたいという気持ちを持つようになってきたのである。ここにこの度、貴重な辻井先生の原稿をいただいて、この嬉泉の新聞も記念すべき号をお届けできることを嬉しく思っているものである。人は人知れず悩むことも多いし、また人が認めなくとも自ら誇りを持って生きなければならない。人知れずということの出来ない、自分の内面の抑えが効かなくなってきている人たちとして、この高機能自閉症やアスペルガー症候群の人たちがいるとするならば、この人たちの自我の力を補助して、一緒に悩み、かつこの人たちの存在意義をはっきり伝えていける代弁者という援助者になりたいものである。

職員の思い

これからに期待を込めて

今、5か月になる娘の子育てに奮闘している。小さい体で懸命に何かを訴えてくるのだが、受け止める側が新米の母ときたものだから伝わらないことも多い。おなかが空いているのにおむつを替えてしまったり、側の物に触れずぐずっているのに眠たいのかと思って抱っこをしてしまったり、ということなどは日常茶飯事である。

そんな中、仕事に復帰した。確かに体は疲れるときはあるものの、気持ちの上で楽に感じる部分も実際には多い。家庭で子供と過ごす時間は本当に楽しいものだけれど、ずっと二人で向き合っていると時々煮詰まってしまって、居心地の悪い状態になることもあるからだ。おそらくまだ解らないことが多い分、不安に感じることも多いからだと思う。

相手が何を感じているのか、何を伝えようとしているのかを感じて受け止めていくことは家庭でも仕事でも変わりはない。でも私にとってはまだ利用者と過ごした時間が子供より長い分、理解しやすかったり、居心地がいいと感じる時があるのだろう。

先日、利用者の一人が、しきりとある質問をしていた。それは表面的な『言葉』そのものにも答えを返せる質問ではあったが、利用者はその『言葉』の内容とはかけ離れたことを本当は確認したかったらしい。しかし、上手く表現できず、以前よく使っていたその『言葉』を口にしていたようだった。その利用者の全体的な状況を見れば、いつもとは少し違う印象を受けるだろうし、そうすれば何かほかに言いたい事があるのではないかと思い付くのだろうが、多くの場合受け止めやすい表面的な事に惑わされてしまいがちである。やはり常に大きな視野を持って接しなければならない、と実感していたその矢先に娘が発熱した。慌てて病院に行くと先生に「熱とかそういった一つの症状を見るのではなく、子供の全体像を見て下さい」と言われてしまった。よく見れば夜中にわざわざ行くほどのことでもなかったらしい。やはりまだまだ……である。

（袖ヶ浦のびろ学園　松田　香）

仕事を通して感じたこと

嬉泉に就職して、約九ヶ月が経ちました。私は大学3年生の時にめばえ学園で1ヶ月間実習をしていたこともあり、最初の数ヶ月は実習が続いているような感覚が強く、なかなか「仕事をしている」という実感がわきませんでした。しかし、この九ヶ月の間に行われためばえ学園での日々の療育、季節ごとの行事、夏に開かれた自閉症実践療育セミナー、夏と冬の合宿、子研のバザー等の仕事を通し、最近は「仕事をする」ということに慣れ、自分の中に「仕事をしている」という実感が持てるようになってきました。今まで行ってきた仕事が、貴重な経験として、少しずつですが、私の中に積み重なってきているためではないかと思います。

このことは、現在行っている第十七回自閉症治療教育実践講座の受付業務を始めた頃に、特に強く感じられました。私は夏に行われた自閉症実践療育セミナーの時にも、事務局の一人として受付業務を担当させていただきました。この夏のセミナーでは、案内リーフレットの発送、申し込みの受け付け、領収書および受講証発行の事務手続きのほかに、外部施設の方と連絡をとるなどの仕事をしました。このような仕事は、学生の時にはもちろん、日々の療育の中でも経験したことがない種類のものでしたので、慣れるまでの間には仕事を進めていく上で戸惑うことが多くありました。

その上、今回の二月に行われる講座では、夏のセミナーの時とは違い、一人で受付業務を行っています。最初は一人で仕事をするということで、とても不安に思いました。しかし、実際に仕事を始めてみると、夏のセミナーの経験から先の見通しをつけることができ、指示された仕事がより具体的に理解できるようになっていました。そのため、自分が思っていたよりもあせらずに仕事をすることができましたし、気持ちに余裕が生まれたように思います。

これから先、「仕事をする」ということに慣れ、自分に余裕ができたと感じている分、今まで以上に気を引き締めて仕事をしていきたいと思います。

（めばえ学園　河野亜沙子）

生きていること

一九五〇年に生まれて七五年に福祉の分野に踏み込んだ私が節目の年令で新しい世紀を迎えることとなった。

児童養護施設に十七年勤めた後この嬉泉にお世話になり早いもので八年が経つ。気持ちの上では若い職員の方々と変わらぬつもりでいたのだが、健康診断で意外にも要精密検査項目を指摘されあせってしまった。丈夫で長持ちが大切と思っているので、このショックは大きかった。（検査結果は何事もなく心配はなくなった。）

養護施設の時代には、それこそドラマのような体験を数多くした。その中で一番印象深く残っているのは…中学を卒業し、高校進学を目前にした十五の春の少年に突然音信不通だった父親が現れ、「義務教育を終了したのだから働かせる。」と迫ってきた。進学を強く希望する少年との間で押し問答が続き無理矢理連れ去ろうという時、仲間の少年達が立ちはだかり、とうとう退散させ、次に来たら少年を家出させ行方不明にしてしまおうと真面目に計画していた…（この少年は高校・大学と進み、今では児童養護施設の職員になっている。）

たまたま二十才の時、現在でいう知的障害者更生施設に一年住み込みで働いたことが縁で、卒業後はこの方面に就職しようと考えていた。事情で先に述べた養護施設に就職したが、それから時を経て四十才をすぎてから知的障害の方達とおつきあいするようになり苦悩すること、喜びをわかちあうこと様々だが、自分が「人と接する仕事」を望み、現在もその道に居ることを喜び感謝している。

人が生きていくということの様々な局面をみて『生きているということ』は何なのか考えさせられることが多い。障害を持つ方々と接し、またその保護者の方々と接するなかで、障害の有無にかかわらず『生きる』という事の意味をこれからも考え続けたい。

当り前のことだが死を境に他者との関係は断たれてしまう。ならば生きるということは、自分と周囲の人々との関係性の中で最善を尽くすということなのだろう。これからも元気に楽しく人と接していきたい。

（赤塚福祉園　冨田順三）

第二の人生

小学校二年生から始めた剣道。青春時代を振り返ってみると私は、十五年間竹刀をにぎり続けてきました。時には、練習が厳しく休んでしまおうと思ったこともありましたが、剣道一筋の私は、自然と足が道場へと向かい、しっかり気持ちの良い汗を流していました。稽古を通し厳しさを乗り越える力や努力することの大切さ、目標を達成できた充実感、負けることの悔しさなどいろいろなことを学んだ剣道人生でした。そんな剣道一筋だった私の生活を変える出来事が二千年に起こりました。それは、嬉泉に就職しすこやか園に配属されたことです。

仕事が始まり子どもたちに出会い、私の心はすぐに子どもたちの魅力にはまり、虜にされてしまいました。仕事の帰り道やお風呂に入っている時、ショッピング中など、気が付けば今日あったことや自分の関わり方などを考えていたり、子どもたちの顔が次々と浮かんできたりします。友人や家族には、「最近、赤ちゃんクサイよ。」とか「ミルクのにおいがするね。」と言われたり、習慣なのかリュックサックを背負いなおす時「よいしょ。」と言いながらまるで、子どもをおんぶするかのように、かばんの底に手を当ててなおす程すっかりはまっています。

子どもたちの笑顔や仕草、涙や一生懸命な顔、その時々に見せる表情に出会える喜びもあれば、逆にクルクル表情を変える子どもたちに惑ったり、悩んだりすることもあります。でも、その一つ一つの思いを理解・解決していくことで「自分」という大きな基盤が出来、そして、子どもとの強い信頼関係が生まれてくるのだと思いました。いろいろな感情をストレートにぶつけ、関わりを求めてくる子どもたちに気がぬけず、毎日がドキドキできる私は、とても幸せだと思います。そして、そんな子どもたちとどう向きあうか考えている私は、やる気に満ちあふれています。

これから一年一年経験を積んでいく中で、今しかできない事、今だから気づき感じられることも忘れずに大切にしていきたいです。そして、たくさんの人たちからいろいろな事を吸収し、自分の力にしていきたいと思っています。

（すこやか園　飯塚春紗）

嬉泉の出来事

施設の新しい課題
ーサービス評価と苦情解決ー

平成12年度から実施された東京都の入所施設サービス評価の情報公開は様々な議論を関係者に輩出させているが、考えれば当然なことである。私たちは、要求や気持ちの表現がスムーズでない自閉症児・者と共に生活する中で、必然的に個別処遇に徹しようとしてきた。また、開設当初から保護者が施設に出入りされることは自由で、プライバシーにかかわること以外は見学者に対してもありのままに見てもらっていたので、どこかを大きく変えることはなかったが、改めて緊張感を持って点検してみることは有益であった。しかしながら、職員配置が変わらない中で労働時間が週40時間になり、又、措置費が10％以上もカットされるという状況がある。その中で全入所者の個別のニーズにきちんと対応していくことはどういうことなのか、個室化、私物収納場所の確保、電話・FAX・テレビ・ビデオなどを何時でも自由に（邪魔されないで）利用出来るように環境を整えるとはどういうことなのか、行政でも現実的に考えてほしいと痛感する。関われば関わるほど個別的なニーズははっきりし、分化し、当然増える。有給を取るどころか、自分の時間を沢山使って、利用者と長時間個別に話し込んだり、町に出掛けて行く職員を見ると、「これ以上頑張ってほしい」と求めることは園長として耐えられない。評価するとなるとAを目指したい。この状況で、利用者を取るか、職員を取るかの答えをどうだせばよいのだろう、と感じ続けた1年だった。自腹をきってAを目指している施設にその評価として何らかの喜びがほしいというのは贅沢なことだろうか。

（袖ヶ浦ひかりの学園　奥村幸子）

区立福祉園（更生）の地域割り

板橋区には現在七つの福祉園があり、さらに一ヶ所増え八ヶ所となる。現在は、法内の更生施設であるが、当初は区の単独事業として「心身障害者生活実習施設」として設置・運営され、順次区内に点在して建設されてきている。

養護学校高等部卒業後の日中活動を保障する場として建設・確保し、区内の全域に生活する利用者を卒業毎に受け入れてきているため、各福祉園ともに利用者の住まいが区内のあらゆる場所に点在しているわけである。

板橋区は地図を広げると長くて広いエリアであって、利用者によっては通園バスの乗車時間が一時間半を越える人も少なくない。登降園の時間帯には、福祉園のバスが複雑に交錯しながら板橋区内全域を走行している。

こうした状況にあって、特に重度重複の重症の利用者が増えてくる中、バスの乗車時間の長さが利用者の心身にかなり負担になってきていることと、出来るだけ住まいの近くの福祉園を利用することが地域福祉の実現に叶うこととして、区内を福祉園所在のエリアに分割してそのエリア内の在宅障害者が通所するという「地域割り」という考え方が板橋区当局から出てきたのである。

計画発表からすでに四年が経緯し、区担当者による説明会が開かれ、今年度転園先の福祉園への「体験通園」が実施された。そしていよいよ四月に一斉転園することになった。移籍する利用者は平均的に各園ともに四～五割である。

赤塚福祉園のほとんどの利用者家族は園の援助・活動内容を評価し満足しており、また期待もしてくれている。職員と利用者相互の信頼関係が深まり、利用者もご家族も転園を望まないのが本音であるが、区内全域で一斉に進められる施策に積極的に反発する動きは表面的にはない。

「地域割り」による「措置変更」は、現在は法的な問題はないのであろうが、社会福祉法の成立により「福祉サービスの選択」という時代を目の前に迎え、その権利をどう保障していくのかこれから議論となってくる。

（赤塚福祉園　友田　篤）

合同運動会と交流保育

平成十二年十月に、めばえ学園とすこやか園で初の合同運動会を行ないました。『運動会』という言葉で、普通思い浮かぶものは、かけっこや綱引き、玉入れ、リレー等、競争したり、勝敗を争うものがほとんどです。

でも私達は、めばえ学園とすこやか園の子ども達、双方の保護者の方々や職員も皆が楽しめる運動会にしたい、そしてこの運動会がめばえ学園とすこやか園の交流の機会の第一歩となるようにしたいと考えました。何度かめばえ学園の職員と話し合い、知恵を出し合って「子どもの王国の運動会」として行なうことにしました。

すこやか園の子ども達には、運動会の数日前に、子どもの王国の王様から招待状が届きました。『ぜひ子どもの王国に遊びに来てください』と書いてありました。子ども達はワクワクしながらその日を待ちました。

当日は、王国という雰囲気を出す為に、職員が王国の住人に仮装して子ども達を迎えました。王様(所長)、木の精、魔法使い、ふくろう博士、王国のコック長、おしゃべり猫、働き蜂、豚やうさぎや河童等々。子ども達も自分の好きなものに仮装してパレードをしました。

全員での体操やダンスがたくさんあり、中でもテレビで人気のりなちゃん(ちびっこマン体操)や慎吾ママ(おはロック)の登場では大へんな盛り上がりでした。

グループごとの種目もありましたが、親子一緒でのゲーム的なものが主で、誰もが自由に参加できるようにしました。

合同運動会について、すこやか園の保護者のアンケートでは「皆が参加できるので良かった」「仮装が本当の子どもの王国という感じだった」と、好意的な感想が多く寄せられました。この運動会を機に、めばえ学園と交流を日常の保育の中で取り組んでいこうと思っています。

今は時々、めばえ学園の自由あそびの時にすこやか園の子ども達が遊びに行くことから始めていますが、これを継続させ、子ども同士が自然に関わっていけるような援助ができればと考えています。

(すこやか園　津留明子)

ようこそ「あそびクラブ」へ

「フーッ疲れたー」「もうあれから1ヶ月経ったんだね」「また、あっという間に1ヶ月経っちゃうよ」これは毎月、地域療育のスタッフとボランティアさんとの間で交わしている会話です。読者のみなさんはいったい何のことやら?と思うでしょうね。

袖ヶ浦ひかりの学園では平成十年十月より、千葉県から国の事業である障害児(者)地域療育等支援事業の委託を受け、君津圏域を中心に、在宅している障害児(者)の方たちの地域支援を行っています。冒頭の会話は、地域サービスの一つとして毎月第3土曜日に袖ヶ浦市内の公民館をお借りして行っている「あそびクラブ」(障害児の遊び場作り活動)のスタッフ反省会の時の会話です。実はこの活動は思いの外体力がいります。というのは公民館には遊具が全くないため、学園の遊具(トランポリン・ボール・マット・おもちゃ等)を毎回トラックに乗せ、公民館に運び込んでいるからです。「まるでジプシーだね。」とつぶやきながら…そして多目的ホールに遊具をセットし子ども達を待ちます。子ども達はお気に入りの遊具とお目当てのスタッフ・ボランティアと個別に汗だくになって遊びます(正味1時間程度ですが)。

このクラブは週末の子ども達の遊び場として、同じような悩みを持つ親御さん達の集う場として、そして障害児に関われるボランティアを育成する目的で立ち上げ2年が経とうとしています。平成14年度から、学校教育が週休2日になるので、ますます週末の過ごし方に苦慮する親子の相談が増えると思います。現在もクラブは、口コミで参加人数が増え嬉しい悲鳴を上げていますが、スタッフの人手が足りず、地域のボランティア、休日参加の職員ボランティアに支えられているのが現状ですが、それでも常にボランティアは不足している状態です。現在は袖ヶ浦市内で行っていますが、参加児の地域性を考えるともう一ヵ所拠点を作らなければと考えています。それには関係機関の理解や、スタッフの充実等課題は山積していますが、遊びに来てくれる子どもたちの笑顔を支えにがんばります。

(袖ヶ浦ひかりの学園　柳　淳一)

ひかりのタイムス

独立第39号

今号の「ひかりのタイムス」は、袖ヶ浦ひかりの学園の選択的作業である「菓子部」を特集しました。

利用者から寄せられた原稿は、校正等をせずに載せています。

菓子部での取り組み

平成十一年に長浦駅前の「グループホーム春のひかり」の一階に、「ひかりのファームFORT」として喫茶店がオープンしました（毎週火曜～金曜日の午前十一時から午後四時まで営業）。学園の作業の一つである菓子部もそれに伴い、本格的にスタートしました。

新しいお菓子作りの取り組みに試行錯誤を重ねながら、さくら組の工藤由木子さん、山中和栄さんが、失敗を重ねながら着実に腕を上げ、仕事の流れや組織としてのシステムを作ってきました。

菓子部で生産されたお菓子は、喫茶FORTで、クッキー、パウンドケーキ類九～十種類、店内での軽食用としてのケーキ四～五種類を卸し、ほかに、のびろパン販売を通して、徐々に地域に定着してきています。最近では需要が高まり、工藤さんのクッキー、山中さんのパウンドケーキだけでは一日の生産量が間に合わず、平成十二年より、午後の作業にひのき組の二名が加わりました。伊藤訓育さんがビターチョコナッツケーキ、齋藤成尋さんがFORT用の生ケーキ三種類を担当し、新たなスタートをきりました。また最近は、浜ノ園武生さんも加わりました。

皆それぞれに、菓子部で働くことを誇りにしており、「頑張れた」ということを支えに作業後の評価を期待して、日々の職員とのやり取りを楽しみながら仕事に取り組んでいます。

注文品や試作品の取り組み、慰労会や給料日の外出等、職場として皆から魅力を感じてもらえるような活動も進められています。

袖ヶ浦ひかりの学園職員　本田　知子

菓子部

私は、パウンド型のケーキ作りをやっています。最初はバターを用意してレンヂで待つこと1分間でチーン！で、やわらかくなりました。ハンドミキサーでコネました。さとうも3回分か半分に入れました。タマゴも3回分または黄味と白味に分けました。タマゴの白味用のメレンゲは、のこりのさとうを入れてあわ立てました。アーモンドパウダーも、ふるいにかけて、粉類を3回分けて、まぜまぜして、型に流してオーブンで30分～35分やきました。シロップ作りをやってもらいました。ウイスキー、ブランデー、ラムの3種類をさとう100g、水100cc、ウイスキー、ブランデー、ラムを100g用意しておきます。すごく売れると思います。FORTめざしてがんばりましょうネ！

袖ヶ浦ひかりの学園利用者　山中　和栄

菓子部へ移った

平成十二年五月九日に、今まで僕は、長年勤めてきたしんめい販売の仕事を辞めて、変わりに菓子部の仕事に、入ったのである。

担当には本田知子さんを中心に仕事を選んだのである。菓子部は楽しいことである、いわば銀行の再編です。

特に、メンバーには、伊藤訓育と齋藤成尋さんに山中和栄さんにそして、工藤由木子さんのメンバーです。

小林祥子さんや、平沢郁子さんに注意を、受けました。

FORTの、担当は小野双葉さんと、黒田淑江さんと、山本舞子さんです。

毎週水曜日と金曜日のいずれも午前九時から、十時三十分までFORTの仕事をてつだっています。

山中さんは、抹茶ケーキと、紅茶ケーキなどを、つくっています。

齋藤さんは、ベイクドレアチーズケーキなどを作ります。

工藤さんは、クッキーを作っています。

しんめい販売や、巡回販売から移って来ました。

中村さんは、洗剤の仕事をしています。菓子部は、頑張っています。

袖ヶ浦ひかりの学園利用者　伊藤　訓育